

# 『枕草子』における黄系の色に関する一考察

房

穎

平安時代は「色彩の黄金時代」と呼ばれるほど、より豊富な色が創り出され、一般生活にも大量に、しかも巧みに用いられるようになった。特に、平安貴族は服色に愛着を持ったと見え、春には紅梅や桜、夏には卯の花や杜若、秋には黄菊や紅葉、冬には氷襲というように、季節に応じて、美しい色を組み合わせた服を着用するように相当の工夫をしたらしい。そして、平安人は色彩に対して強烈な美意識をもっていた。この時代の文献に現れた、色にかかわる描写に用いられた美的用語は一三七語もあるという<sup>(1)</sup>。

平安生活の美の一環としての色彩はいうまでもなく平安文学の作品にも反映した。伊原昭氏の調べによると、平安時代の文学作品に現れた色は少なくとも二四〇種を超えするという<sup>(2)</sup>。特に、平安貴族の生活を描いた文学作品は、より一層美しい色彩を登場させ、平安貴族の色に対する豊かな情緒や感覚が細かく表現されたのである。『枕草子』を例に言えば、六五種類の色名が登場し、四四九箇所の色彩表現があつたので<sup>(3)</sup>、色彩への関心の最も高い平安文学作品の一つだと言われる。作者の清少納言は色彩にかかわる表現において、「をかし」、「あはれ」、「めでたし」、「あざやか」、「清ら」など、高級な賛美の言葉を惜しまない。従来、『枕草子』の色彩についての研究は少なくない。紫、紅、白など、平安朝の代表的な色が特に注目を集めている。そこで本稿では、それほど注目されていないような黄系

の色について考察してみたい。

日本語には黄系の色名が八〇種以上も挙げられるが<sup>(4)</sup>、平安時代の主な文学作品に現れたのは黄、浅黄、薄黄、黄金色、刈安色（荊安色）、萱草色、朽葉、黄朽葉、黄蘗色、支子色（梔子色）、練色、黄蘗色、柴色、蒸栗色、山吹色など、十数種ほどである<sup>(5)</sup>。同じ黄系の色でも、「黄」という基本的な色名より、植物や自然物の名をもつ色名が多く現れた。これらの具象的な色名は、同じ系統の色合いの細かい差異を繊細に弁別することができる。そこから、平安人の色彩に対する鋭敏な感覚がうかがえよう。

『枕草子』に登場した黄系の色名は八種ある。すなわち、山吹、練色、朽葉、黄、黄朽葉、刈安色、薄黄、黄金色である。これらの色名を使った表現は、合わせて一六箇所ある<sup>(6)</sup>。もちろん、色名を使わずに色を表現した用例もあるが、それについての判別は人々の感覚によつて違う場合が多く、また、色名を使った表現にこそ、作者のその色に対する感情を明らかに表せると思われるので、色名を使わない色表現は今回の調査範囲に入れないことにした。一六例は白、紅、黒、赤、青、紫などの色よりはかなり少ないが、その一六例から、清少納言の黄系の色に対する態度が伺えるのではなからうか。

『枕草子』に最も多く用いられた黄系の色名は山吹である。山吹の花の色を指し、赤みのかかった、鮮やかな黄色である<sup>(7)</sup>。古くから黄系の代表的な色として使われてきた。春は梅の花から始まり、山吹の花に終わるというので、山吹色は春の色だと思われ、平安時代では山吹色の衣は春に着用されたと言われる。『枕草子』に現れた山吹は、すべて服色を描写する用例である。

山吹に次いで二番目に多く登場したのは練色と朽葉である。練色は生糸を手で練り上げて、柔らかくしたものの色

で、薄くて白っぽい黄色である<sup>(8)</sup>。白色として扱われる場合もある。

朽葉色は朽ちていく木の葉の色で、やや赤みの黄色である<sup>(9)</sup>。朽葉の色といっても、木の葉の微妙な色合いの変化を考えれば、実に数多くの色が考えられる。平安時代の人々はきちんと朽葉色の使い分けをしていたようで、朽葉の青みが強いのを青朽葉色、赤みが強いのを赤朽葉色、黄味が強いのを黄朽葉色という。『枕草子』には黄色系の黄朽葉の用例もある。

また、刈安色は最も古い黄系の色だと言われ、茹安色か、刈安染とも呼ばれる。緑みのかかった鮮やかな黄色である<sup>(10)</sup>。

山吹も、練色も、朽葉も、刈安も、黄系の色であるが、色名には「黄」という字が現れない。むしろ、直感的に色相の同じ自然物でその色を名づけたものである。それに対して、概念的、抽象的な「黄」色の使用例もある。薄黄は薄い黄色の意味で、また、黄金色は字面通り、黄金のように輝く黄色である。

以上の八種の色のほかに、もう一つ「あざぎ」の使用例もある。平安時代では「浅黄」か「浅葱」と書いて、「浅黄」は薄黄色の意味で、「浅葱」は薄青色の意味である。『枕草子』の底本では仮名書きなので、意味の判別が難しい。私の読んだ注釈書のかぎりでは、いずれも「浅葱」の意で扱い、「薄青色」と解釈している。従って、「あざぎ」の用例は今回の調査の内容にしないことにした。

平安時代の人々は色彩を多種多様に活用していた。特に何種かの異なる色の配色は平安色彩の特徴だと言える。上記の一六例もその多くは、単一の黄系の色でなく、多色の複合、或いは対照を表現したものである。最も代表的な配色は襲の色合いである。

『枕草子』における黄系の色に関する一考察

一一〇

A. 御簾みすの内に、女房、桜さくらの唐衣からぎぬどもくつろかにぬぎ垂たれて、藤ふぢ、山吹やまぶきなど、色々このまじうて、あまた小半こはん部の御簾みすよりも押し出でたるほど、昼ひの御座おましの方かたには、おもまる足音高たかし。

(二一 清凉殿の丑寅の隅の 五〇ページ)<sup>(1)</sup>

用例Aに現れたのは山吹襲の色合いである。襲の色合いについては古来いろいろな説があるが、山吹襲については、表淡朽葉裏黄の色合いだというのが一般的である。女房たちが桜の唐衣をゆつたりと着て、藤の襲や山吹の襲を着ている。襲の色合いはとても感じが良い。

B. 汗衫かざみは春は躑躅つづじ。桜。夏は青朽葉あをくちば。朽葉。

(九 汗衫 四五六ページ)

夏の汗衫と言えは青朽葉の襲と朽葉の襲がいい。朽葉襲は表山吹、裏黄の色合いである。山吹襲も朽葉襲も黄系の色同士を複合して、その色合いの微妙な変化に調和を感じさせる。清少納言は両方に好感を示し、襲の色合いが現した色の調和感に対して賛美の言葉を加えた。同じ山吹襲であるが、次の例では違う評価を受けた。

C. 右衛門佐宣孝あもののすけのぶたかといひたる人は、……三月つごもりに、紫のいと濃こき指貫さしぬき、白あをき襖、山吹やまぶきのいみじうおどろおどろしきなど着て、……うちつづき詣でたりけるを、帰る人も詣づるも、めづらしうあやしき事に、「すべて昔よりこの山にかかる姿の人見えざりつ」と、あさましがりを、……

(一一五 あはれなるもの 二一八ページ)

藤原宣孝が大層濃い紫の指貫に白い狩襖と大げさな山吹襲の下着という格好で御嶽参詣に行った話である。当時の御嶽参詣の時は「なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてこそ詣づと知りたれ」、身分の高い人でも粗末な身なりで参詣するが、性格がやかましい宣孝はそれを知っていながら、わざと「いみじうおどろおどろしき」山吹色の

装束を着用し、人を呆れさせたのである。男性が着用する山吹襲は、若向きで、華美な印象がある色なので、御嶽参詣の場にはひどく仰々しくて、不都合である。この段では、その場合に相応しない山吹襲は、むしろ調和感を破った存在となつてしまったので、参詣帰りの人の口を借りて、「めづらしうあやしき事」という。どちらかといえ、見くびる評価である。

ほかの配色の用例を見てみよう。

D. 橘たちばなの葉の濃く青きに、花のいと白う咲きたるが、……花の中より黄金こがねの玉かと見えて、いみじうあざやかに見えたるなど、朝露に濡れたるあざばけの桜におとらず。

(三五 木の花は 八六ページ)

四五月の橘は濃い青色の葉に、一層白く見える花、そして、白い花の中から黄金色の実が見える。大変くつきりとした色の対比は美しくて印象的である。

E. 右中将おはして物語したまふ。「今日けふ、宮にまゐりたりつれば、いみじう物こそあはれなりつれ。女房の装束さうてく、裳も、唐衣からぎぬをりにあひ、たゆまで候ふかな。御簾みすのそばのあきたりつるより見入れつれば、八、九人ばかり朽葉くちはの唐衣、薄色の裳もに、紫苑しきん、萩はぎなどをかしてゐる並みたりつるかな。……」

(一三七 殿などのおはしまさで後、世の中に事出で来 二六〇ページ)

道隆の薨去の後に、道兼、道長、伊周の間に権力の争いが生じた。やがて、実権が道長に移り、伊周が謀叛の罪に問われ遠流となつた。中宮も落飾され、小二条の邸にうつった。小二条で氣を抜かずには伺候している女房たちは朽葉の唐衣、薄紫の裳に、紫苑や萩の衣を美しく着て、並んでいる。

F. 好き好きしくて人かず見る人の、……白き衣きぬどもの上に、山吹やまぶき、紅くれなゐなどぞ着たる。

(一八二 好き好きしくて人かず見る人の 三二〇ページ)

この段では、白い衣に山吹か紅の衣を着た、「まひろげ姿」の好色男が描かれている。

G. 五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、うへの衣の色いときよらにて、革かわの帯おびのかたつきたるを、宿直姿とのもすぎだにひきはこへて、紫の指貫さしぬきも雪に冴さえ映はえて、濃さまりたるを着て、相あひの紅くれなゐならずは、おどろおどろしき山吹やまぶきを出だして、からかさをさしたるに、風のいたう吹きて、横さまに雪を吹きかくれば、すこしかたぶけて歩あゆみ来るに、深き沓くつ、半靴はんくわなどのはばきまで、雪のいと白うかりたるこそをかしけれ。

(二三〇 雪高う降りて、今もなほ降るに 三六八ページ)

若々しい五位や四位の人の、雪に映えて一層濃さがまさっている紫色の指貫に紅か、仰々しい山吹色の相を着て、雪の中を歩いている濃艶な場面である。

H. 葡萄染えびぞめの固紋かたもんの指貫さしぬき、白しろき衣きぬどもあまた、山吹やまぶき、紅くれなゐなど着こぼして、直衣なおしのいと白しろき紐ひもを解きたれば、ぬぎ垂たれられていみじうこぼれ出でたり。指貫の片つ方はとじきみのもとに踏み出だしたるなど、道に人会ひたらば、をかしと見つべし。

(二八三 十二月二十四日、宮の御仏名の 四三七ページ)

葡萄染の固紋の指貫をはき、白い相を何枚か着て、又山吹や紅の衣などを外にこぼれるように着た男が、有明の月が照る寒い夜に、女と車に相乗りしている場面である。

D、Hの用例はすべて、平安の人々にかなり好まれた白（雪で表現する場合もある）、紫、紅と黄系の色との組み合わせである。例えば、橘の青い葉に白い花と黄金色の実（例D）、朽葉の唐衣と薄紫の裳に紫苑や萩の衣（例E）、白い衣に山吹か紅の衣（例F）、紫の指貫に紅か山吹の相の穿衣姿で白い雪の中を歩く（例G）、葡萄染の固紋の指貫に白い単衣と山吹か紅の衣（例H）などである。いずれも多色の対照や対比をする表現に黄系の色を入れた用例である。これらの用例では、平安時代の人々、特に平安貴族に好まれた、いわゆる平安朝の代表色である白、紫、紅は真っ先に読者の目を惹き、中軸となるが、黄系の色はともすると、それに合わせるような、付属的な存在となってしまう。

それに、例Iでは、濃い色との組み合わせで、例Jでは、二藍か何かの末濃染との組み合わせである。

I. いと濃き衣（こきぬ）のうはぐもりたるに、黄朽葉（きくちば）の織物、薄物（うすもの）などの小桂（こけい）着て、まことしう清げなる人の、夜（よる）は風のさわぎに、寝られざりければ、久しう寝起きたるまゝに、母屋（もや）より、すこしゐざり出でたる……

（一八九 野分のまたの日こそ 三三八ページ）

野分の吹いた翌日の朝、濃い色の光沢が薄れている衣に、黄朽葉色の織物や、薄い織物などの小桂をうちかけて着ている人は本当にさっぱりして美しい。

J. ほそやかなるをのこの裾濃（すそご）だちたる袴（はかま）、二藍（ふたあい）かなにぞ、かみはいかにもいかにも、掻練（かいはり）、山吹（やまぶき）など着たるが、沓（くつ）のいとつややかなる、筒（とう）のもと近う走りたるは、なかなか心にくく見ゆる。

（一九〇 心にくきもの 三三三ページ）

二藍が何かの色の末濃染の袴をつけ、上の方にはいかにも似つかわしい搔練や山吹色の衣を合わせて着て、つやつやした靴を履いて、車の筒のあたり近く走っている従者の姿は奥ゆかしい。

例Iではやはり、詳しく条件をつけた「濃き衣」に黄朽葉の織物の小袷を合わせる。例Jでは、二藍などの色を基準にし、相応しいか相応しくないかと山吹などを判断するのである。やはり、黄朽葉も山吹も合わせる色として使われたのである。もちろん、「あざやかなり」(例D)とか、「をかし」(例E、G、H)とか、「清げなり」(例I)とか、「心にくし」(例J)とかいうのは、黄系の色に対する好評だとは思われない。

一方、黄系の色が単独で用いられる使用例は少ない。次の四例はすべて類聚的章段である。

K. きたなげなるもの……いづれもいづれもきたなげなる中に、練色（ねいろ）の衣こそきたなけれ。

『全集』一五二 きたなげなるもの 二九六ページ(12)

L. M. 単衣（ひとへ）は白（しろ）き。昼（ひ）の装束（さうそく）の紅（くわ）の単（ひとへ）の相（あ）などかりそめに着たるはよし。されど、なほ白（しろ）きを。黄（わう）ばみたる単衣など着たる人はいみじう心づきなし。練色（ねいろ）の衣（きぬ）なども着たれど、なほ単衣は白（しろ）うてこそ。

(二六五 単衣は 四一九ページ)

N. 薄様（うすやう）、色紙（しきし）は白（しろ）き。紫（むらさき）。赤（あか）き。刈安染（かりやすぞめ）。青（あお）きもよし。

(一本 一二 薄様、色紙は 四五七ページ)

用例Kでは、見た目に汚らしいものを列挙したが、すべての汚らしいものの中で、何よりも白っぽい練色の着物は特に汚いという。用例L、Mでは、「白（しろ）き」を繰り返して白い単衣の美しさを強調するが、その白い単衣は、一旦古くなって黄ばんだ色になれば、ひどく気に入らない。練色のものは着ることもあるが、やはり白がいい。黄ばんだ色



も練色も、マイナスの評価を与えられた。しかも、例Kと例Mのいずれもマイナスの例として練色をあげたのである。清少納言は練色や黄ばんだ白のような、淡くて、生気がない雰囲気の色合いは好まないばかりか、むしろ嫌悪な気持ちで表現したのである。それに対して、山吹や朽葉のような赤みのかかった黄色や、金色の光が輝く黄金色など、彩度の高い、鮮やかな黄系の色に思いを傾けているようである。

また、例Nでは、氣に入る薄様と色紙を列挙する時、白、紫、赤に次ぎ、刈安染をあげた。緑みがかった刈安は練色より良いが、白や紫や赤ほど好まれないのはつきり分かる。

『枕草子』では、黄系の色については服色に使われた用例が圧倒的に多い。自然風景に使われたのはわずか二例である。

O. 九月つごもり、十月のころ、空うち曇りて、風のいとさわがしく吹きて、黄<sup>ト</sup>なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。(二八八 風は 三二七ページ)

この段では、「黄」で落ち葉の色を形容する。晩秋か初冬の風がひどく騒がしく吹いて、黄みのかかった色になった木の葉が舞い落ちてくる美的場面はしみじみとした情趣がある。

P. 日は入<sup>いりひ</sup>日。入り果てぬる山の端<sup>は</sup>に、光なほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄<sup>わづ</sup>はみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり。(二三四 日は 三七〇ページ)

日が沈んだが、山際にはやはり光が残っている。そのあたりに薄く黄ばんだ雲がたなびいている日暮れ時の風景はしみじみと心を動かす。

二例ともその風景は「あはれ」と評価された。「あはれ」は情趣のある美を意味するが、どこかに、悲哀や哀愁などの情緒が潜んでいる美しさの類であろう。例Oで描写された、晩秋の風に吹かれ、ほろほろと零れ落ちる黄色の葉は季節の終結を告げる。例Pで描写された、黄昏の薄黄色に染められた雲は一日の終結を象徴する。いずれも、むしろ「さびしい」、「かなしい」という心情の反映ではなからうか。情趣はあるが、憂鬱や悲哀の雰囲気はかなり漂う風景に、黄色が登場したのである。

従来の研究から分かるように、清少納言は特に紫や白や紅などに好感を持ったらしい。例えば、第八四段に「すべて何も何も、紫なるものはめでたくこそあれ。花も、糸も、紙も」とあるが、なにもかも、その色は紫でありさえすれば「めでたし」という。ともかく作者にとつては、紫は無条件な美の象徴である。紫色があれば、それが唯一の注目点となり、ほかの一切は無視してもかまわないようである。しかも、「めでたし」という最高級の美的賛辞を紫色そのものに当てている。それに対して、専ら、黄系の色そのものに対する好評価は見られない。黄系の色は色として独立した存在ではなく、何らかの配合の一要素として描かれたものが多い。紫のように、単独の色として美的感覚を呼び出すことはできない。つまり、黄系の色そのものは美意識の対象とならなかった。

しかも、『枕草子』に現れた黄系の服色の表現では、それを身につけた人は女房たち、右衛門佐宣孝、五位四位の若い人、好色男、車に乗っている男と従者である。宣孝や五位四位の人もしれば、従者という下人もいるが、しかし、天皇や中宮など皇族の人はいない。紫や赤などと違って、黄系の色は高貴な人や場には用いられないと見える。推古天皇の時代、「黄」色は「五正色」の一つとして冠位の服色にされたことがある。紫や赤と並べて、高貴なイメージを有していた時代があったのである。しかし、それは唯一の記録で、その後、孝徳天皇の大化三年（六四七）

の冠位改正の時から、黄色は完全に姿を消したのである。それから黄系の色は正式な服色ではなく、官位のない庶民の服色となった。平安時代になって、更に卑賤なイメージをする色になったと思われる。『枕草子』においてはさほど卑賤な色とまでは至らないが、高貴さを表す色とも到底考えられないのである。

註(1) 『王朝の色と美』（伊原昭 笠間書院 一九九九年一月）による。そのうちの二〇語は非美を形容する語だという。

(2) 『日本文学色彩用語集成——中古——』（伊原昭 笠間書院 一九七七年四月）による。歌集、物語、説話、日記、随筆など、平安時代の代表的な六〇ほどの文学作品を検索対象とした調査の結果。

(3) 『清少納言の独創表現』（松田豊子 風間書房 一九八三年三月）による。

(4) 『色の事典』（小島尚美 西東社 一九九六年一月）、『日本の伝統色 色の小辞典』（福田邦夫 読売新聞社 一九八七年五月）、『日本の色辞典』（吉岡幸雄 紫紅社 二〇〇〇年六月）、『色の手帖』（尚学図書編集 小学館 一九八六年一月）、『色名事典』（清野恒介・島森功 新紀元社 二〇〇五年七月）、五つの色辞書のいずれかが黄系の色として取り扱う色名をすべて合わせたところ、八七種ある。

(5) 『日本文学色彩用語集成——中古——』によれば一五種ある。

(6) 『校本枕草子』（田中重太郎編著 古典文庫 一九五三年一月）の総索引による。用例数は山吹六例、練色二例、朽葉二例、黄二例、黄朽葉一例、刈安色一例、薄黄一例、黄金色一例である。

(7) 『日本の伝統色 色の小辞典』では鮮やかな黄色、『日本の色辞典』では赤みを帯びた黄色、『色の手帖』では赤みの黄、『新版 日本の伝統色——その色名と色調』（長崎盛輝 青幻舎 二〇〇六年六月）では冴えた赤みの黄色、『日本色名大鑑』（上村六郎・山崎勝弘 甲鳥書林 一九四三年四月）ではかなり赤みを帯びた黄と解説している。

(8) 『日本の伝統色 色の小辞典』では薄い黄色、『色の手帖』では黄味の白と解説している。

(9) 『日本の色辞典』では黄色がわずかに赤茶色に色づいたもの、『色の手帖』ではくすんだ赤みの黄、『新版日本の伝統色——その色名と色調』では褐色みの黄橙色、『日本色名大鑑』では殆ど黄に近い帯赤黄色と解説している。

(10) 『日本の色辞典』では澄んだ黄色、『色の手帖』では濃い緑みの黄色、『新版日本の伝統色——その色名と色調』では緑み

『枕草子』における黄系の色に関する一考察

『枕草子』における黄系の色に関する一考察

二八

の鮮やかな黄色」と解説している。

- (11) 『新編日本古典文学全集18 枕草子』（松尾聡・永井和子校注訳 小学館 一九九七年十一月）による。本文の解説も基本的にこれに従う。

- (12) 三卷本系統第一類本の陽明文庫蔵本を底本に用いた『新編日本古典文学全集 枕草子』にはこの段がない。能因本系統の学習院大学蔵三条西家旧蔵本を底本に用いた『日本古典文学全集11 枕草子』（松尾聡・永井和子校注訳 小学館 一九七四年四月）によるものである。

（ボウ エイ・吉林大学講師）